目指す地位は縁の下。

ビス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目指す地位は縁の下。

【Ｎコード】
Ｎ６８４１Ｙ

【作者名】
ビス

【あらすじ】
異世界に飛ばされた女子高生、相馬沙羅は、彼女そっくりな貴族の令嬢の身代わりとして後宮入りする事に。
彼女の目下の悩み事は、後宮から逃げる事でも、後宮の一番になる事でも、日本に帰る事でも無く、大好きな皇帝陛下を、どうしたら幸せに出来るか？だった。
美人な奥様方が仲良しだったら、彼もきっと嬉しい筈！と、自分磨きそっちのけで、側室達の間を取り持つ事に奔走する健気な天然少女の話。

プロローグ

私は今、とても悩んでいます。

あ、申し遅れました。私の名は相馬（ソウマ）　沙羅（サラ）。一介の女子高生トリッパーです。
若干妖しい語感な気がするのは、気のせいです。

軽く言ってはいますが、異世界に飛ばされた当初は、本当に驚きました。

友達と夏休みに遊園地へ行って、逆バンジーにチャレンジ。怖くてぎゅうっと瞑っていた目を開けたら薄暗い路地裏にいた。ありえん。

普通…いや、異世界トリップに普通の定義があるかは知らないが、セオリーとしては落ちるモンなんじゃないの。
飛んだら異世界ってどんな新境地だ。

そして私が消えた後のバンジーのゴムの行方が気になる。昔懐かしのコントの様に誰か、ばっちんされてないといいけど。

とにかく、不本意ながらトリップしてしまった私は、当然の事ながら訳が分からなかった。先ずは自分の頭を疑った。

でも夢や幻にしては、色んな事がリアルで。
薄汚れた壁に貼られた、色褪せたポスターに書かれた、不可思議な文字。
湿った土の上に、無造作に置かれた樽の影から這い出す、見たこともない形の虫。
夏休みだった筈なのに、肌をさす様な冷気と、嗅いだ事の無い、すえた様な臭い。

五感が私に訴えた。
此処は私が生きていた場所では無い、と。

混乱し、恐慌した私は、その場から一歩も動けずに、震えていた。
寒さと、恐怖に。

で、気付いたら攫われてた。

あ。この辺前振りなんで、色々サクサク進みます。
その時の私の恐怖や憤りは、取り敢えず今は置いておきましょう。

攫われた私の行き先は、奴隷市場か娼館だろうと予想していました。
お先真っ暗です。
見ず知らずの狸親父に好き放題される位なら…と蒼白になりながら

覚悟を決めたのですが、私のついた場所は、どちらでもありませんでした。

其処は豪華なお屋敷で、どうやら貴族のお宅の様です。

でもまだ狸親父に売り払われる可能性が消えた訳じゃない、と警戒する私の前に現れたのは、壮年の男性とその妻らしき女性でした。

因みにダンディーなおじさまでした。奥様は清楚な美人。
妻公認で人身売買とか流石に無いと思うのでセーフ。と私は漸く安堵しました。

安堵したのも束の間、夫婦に抱き締められた。何のプレイだ。

離して下さいとパニくる私に、二人は驚いた顔になり恐る恐る『サラサ』じゃないの？と訊ねた。
惜しい、『さ』がいっこ多い。

彼らは驚き、そして悩んだ後、私にお願いがある、と言った。

そのお願いとやらをザックリ纏めると、彼らはどうやら私に、娘の身代わりになって欲しいらしい。

数日後に嫁入りを控えた彼らの娘が、今日突然いなくなったそうだ。
結婚が嫌で家出とか黄金パターンだよね、と大層不謹慎な事を考えてしまったが、娘は割と乗り気だったらしい。

急に雲隠れしてしまった娘に、彼らは蒼白。
嫁ぎ先は彼らより身分が上。今更此方側から撤回なんて出来ない。

何とかして娘を捜し出そうとした所、娘そっくりの私を発見。
勘違いで攫ってきてしまったと。

…あれ。何かそれ違う黄金パターンな気がする。
娘今ごろ逆バンジーされてませんか？私の代わりに富士山見ながら空舞ってませんか??

そうなると、娘さんを捜し出すのは不可能に近い気がするし、私も娘館行きは遠慮したいので、身代わりで嫁入りを決意しました。

この世界で頼る人もいませんし、どうやったら元の世界に帰れるかなんて全く分からないし、取り敢えずやるやだけやってみましょう。

ところで貴族の奥さんってなにすりゃいいの。
と、早速躓きましたが、正確には貴族の奥さんじゃありませんでした。

嫁ぎ先は、

――なんと王様。

……色々あり得無さすぎやしませんか。

.

側室（仮）の悩み。

「…どうかなさいましたか？サラサ様。」

窓辺に置かれた椅子に腰掛け、ぼんやりと空を見上げていると、気遣わしげな声がかけられた。

緩やかに波打つ栗色の髪、長い睫毛に縁取られたつぶらな瞳。
ビスクドールの様な美少女は、心配そうに私を見つめている。

「大丈夫よ、カンナ。心配してくれてありがとう。」

カンナは、『サラサ』の実家からついてきてくれたメイドさんだ。
此方の世界の常識を知らない私をフォローする為、父母（仮）がつけてくれた娘なので、私が相馬沙羅である事も知っている。

本当のお嬢様では無い私を、気遣い過ぎる位気遣ってくれるカンナを心配させたくなくて無理矢理笑顔をつくるが、カンナは余計心配そうな顔になった。

それでもカンナは、それ以上突っ込む事はしない。
さりげない形で私を慰めてくれる。

「…珍しい茶葉が手に入ったのですが、気分転換にいかがですか？」
「わぁ、楽しみ！カンナのいれてくれるお茶、凄く美味しいから。」
「光栄ですわ。では早速ご用意致します。」

ウフフ、と少し照れた様な微笑を浮かべたカンナが部屋を出て行くのを見送り、私はフゥ、とため息をついた。

…ダメだなぁ。カンナに心配かけちゃうなんて。

でも冒頭で記した様に、此処最近私はずっと悩んでいるのだ。

ちなみに結婚する事に対しての悩みじゃない。
てゆうか、もうとっくに結婚したし。

此処、後宮ですから。

私はこの国…鴻国（コウコク）の皇帝陛下の…えっと何番目だったかな……確か１５？番目くらいの側室となりました。

数日でこの世界の色んな事や、貴族の子女としての礼儀作法その他

諸々を詰め込まれ、半ば朦朧としている内に、気が付いたら此処にいた。どんだけショートしてたんだ自分。

…で、肝心の旦那様ですが……びっくりする位、格好良い人でした。

黒髪黒目のワイルド系で、私の好みど真ん中！！神様ありがとう！！ですが格好良すぎて直視出来ません！！

アイドルだって、遠くから眺めてキャイキャイ騒いでるのが楽しいんです。間近で旦那を見て鼻血出しそうになる妻とか、無いだろ…。

しかも旦那様は、凄く優しい方でした。

詰め込み学習のせいで、ろくに働かない頭のまま後宮入りして、その日の夜が初夜とか…流石にキツかった。

泣きそうになりながらも、拒否なんて許され無い事は分かっていたから、蒼白な顔のまま、私はずっと俯いていた。

夜に後宮に渡ってきた皇帝をお迎えし、さぁ覚悟を決めろ私、と腹を括ったところ、皇帝は私を見て苦笑した。

ちんけな小娘を馬鹿にする笑いでは無く、困ったような微笑み。

寝台に腰掛け、近くのテーブルに用意してあった酒瓶とグラスを手に取った皇帝は、固まった私を手招きし、自分の隣をポンポン叩き座れと示した。

酌を頼む、と酒瓶を渡され、私は慌ててグラスにお酒を注いだ。

皇帝はガラスの器を目で楽しむ様に数回揺らす。
薄暗い灯りの中でも美しい玻璃は、色鮮やかで、昔旅行先で見つけた薩摩切子を思い出した。

私がぼんやり見ている先、鼻先で香りを確かめた皇帝がお酒に口を付けようとしたところで、私は我に返る。

慌てて皇帝を止めた。

今思えば不敬過ぎるが、あるシーンが思い浮かんだのだ。
後宮とか皇帝とか遠い世界過ぎるけど、小説の中ではよく聞く『毒味』。

……毒味とか、正直怖い。でも、目の前にいる人は、私なんかと違って、替えのきかないたった一人のひと。

震える声で『私が先に』と申し出ようとしたが、皇帝は、優しい笑みで私の髪を撫で、そのまま酒を呷った。

いわく、毒には耐性があるから大抵のものは、彼にはきかないそうだ。

後、色やにおい、ついでにカンで分かるらしい。

…カンて。

脱力した私は、だいぶ緊張もほぐれ、その後朝まで皇帝とお話していた。

……アハンな事は一切ありませんでした。

初訪問は、そういう事はしないのかな？と思っていたが、どうやら蒼白だった私を哀れに思った皇帝が見逃してくれた様です。

彼は朝帰る前に、自分の指に傷をつけ、寝台に血痕を残していったから。

お役目を果たせなかったと、私が責められないように。軽んじられないように。

……ジャスト好みな男性に、そんな優しい扱い受けて、惚れない女の子なんている？

私はまんまと惚れましたよ。
まさかの異世界で、旦那様に片想い中です。

…でも、旦那様には既に１０人以上の美しい奥様がいます。
咲き誇る薔薇の様な彼女らに比べたら、私は野草…いや雑草。

恋の成就は早々に諦めました。

でも、あの方の為に何かしたい。

私はずっと、皇帝の為に何が出来るかを悩んでいるのでした。

.

02（前書き）

お気に入り登録して下さった方々、ありがとうございますm（＿）m

凄く励みになります！

02

数日悩んで、カンナを心配させていた私ですが、気分転換にと庭へと散歩に出た日、ある事に気付いたのです。

東屋から、咲き誇る花々を眺めのんびりと過ごしていた私は、視界の端に回廊を歩く貴妃の姿をとらえました。

数人の侍女をつれ、回廊を進んでいるのは、楚々とした美少女。お名前は確か…シャロン様、とおっしゃったか。
鴻国の藩属国の第三王女…そう、正真正銘のお姫さまなのだ。

初めてお会いした時はあまりの可憐さに、大人しやかな美少女！！リアルプリンセス！！とひそかに興奮していたりした。

（…ん？）

ゆったりと回廊を歩いていたシャロン様は、何かに気付いた様に顔を強張らせ、足を止めた。

彼女の視線を辿り、前方に目を向けると、違う貴妃が歩いてくるの

が見える。

沢山の侍女の先頭を、堂々とした様で歩くのは、華やかでキツめの美女。

鴻国の有力貴族の令嬢…アズミ様。

彼女は、シャロン様に気付いたようだが、全く歩調を緩めずに歩く。逆にシャロン様は、廊下の端へと寄ってしまった。…完全に負けてる。

怯える様に俯くシャロン様を、アズミ様は一瞥し、馬鹿にする様に鼻を鳴らす。

…いくら王女様といえど、藩属国の小さな国の第三王女。しかも彼女自身、とてもか弱く大人しい方なので、余計に侮られてしまう。

アズミ様が去った後、シャロン様はお付きの侍女の制止を振り切り、泣きながら駆けて行った。

…たぶん擦れ違った時に、なにか言われたんだろうな。１５くらいの少女が、あんな百戦錬磨っぽいお姉さんには勝てないよね。可哀想に。

…見ての通り、後宮の貴妃同士はとても仲が悪い。

まぁ後宮とは、皇帝の寵を得る為に競い合う女の戦場だから、当り前といえば当り前なんだけど。

でもさ、折角こんなに美姫が集まってるのに、喧嘩ばっかりじゃ、皇帝陛下だって癒されないんじゃないかな。

自分の奥さん達が、仲良しでニコニコしててくれた方が、絶対嬉しいよね！

私は知らず知らずの内に、テーブルの上で手のひらを握り締めていた。

ずっと、後ろに控えていてくれたカンナが、気遣わしげに声をかける。

「……サラサ様？」

「…カンナ。」

「はい？」

振り返った私の顔を見て、カンナは目を瞠った。

今まで意気消沈していたのが嘘の様に、ニッコリと笑う私に、カンナは瞠っていた目を笑みの形に細める。

「私、決めた！」

「はい。」

何を決めたのかも言っていないのに、カンナは穏やかに笑んだ。

お元気になられた様で、ようございました。と私が元気になった事のみを喜ぶ。

会話のキャッチボールが成り立っていない気もするが、良い侍女に恵まれたなぁ、私。

「カンナ、私ね…縁の下の力持ちになるわ！」

大好きな皇帝陛下の為に、何か出来ないかとずっと悩んでいた。

美しい貴妃達の様に、彼の目を楽しませる事も出来ず、

教養ある貴妃達の様に、彼の興味のある話も出来ない。

詩歌や楽器など、雅やかな趣味も無く、私は彼の為に何も出来る事が無いと落ち込んでいたけれど…

彼が後宮に来た時に、癒される様、煩わせる事が無い様に、

私は、お姫様達を仲直りさせよう。

彼女達には色んな目的や責務があるから、それは簡単な事じゃないだろうけれど、

それでも、少しでも歩み寄れる様に、私が頑張ろう。

彼女達が、憂い無く咲き誇れる様。
彼女達が、皇帝陛下を満たし癒せる様に、

私には、私にしか出来ない事がある筈。きっと。

.

皇帝陛下の癒し。

最近、小さな可愛らしい猫を手に入れた。

「…本日もお渡りとは…珍しい。」

執務を終え、食事や湯浴みを済ませたオレが、後宮へ行くと告げると、護衛の武官である幼なじみは何とも言えない表情を浮かべ、そう呟いた。

時刻は疾うに深夜をまわっている。皆寝静まっている中、まるで忍び込む様に後宮へ入るオレを見て、その表情は益々うろんなモノへと変わった。

「…後宮の主人である方が、何故盗人の様に隠れる必要があるのです。」

嘆かわしい、と肩を落とす幼なじみに、オレは苦笑を洩らした。

「他の妃に見つかっては、虐められかねんからな。」

軽く言ってはみたが、実際オレが一人の所に通っている事がバレたら、『虐め』なんて可愛らしいものでは済むまい。

下手したら、命の危険すらある。

「オレが多少情けない思いをする程度で、アレの平和が護れるなら安いものだ。」

「……。」

オレが笑ってそう断言すると、幼なじみは暫く沈黙していたが、やがて諦めた様に嘆息した。

言っても無駄だという事が、長年の付き合いで分かるのだろう。

無言でついてくる幼なじみと共に、オレは後宮の一室を目指した。

「…では陛下。私は此処でお待ち致します。」

「ああ。」

部屋につくと、幼なじみと別れ、彼女の寝室を目指す。

寝室に続く扉の隙間からは、ボンヤリとした薄灯りが洩れていた。

ゆっくりと戸を開けると、寝台から半身を起こし、書物を読む横顔が見える。

いつだったか、書物を読むのが苦手だと言った彼女に、オレが贈ったものだ。

幼子の好むお伽噺なのだが、贈った後に、嫌味にとられはしないかと後悔したのだが、彼女は何とも嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、礼を言ってくれた。

…あんなに真っ直ぐで、愛らしい存在を、オレは他に知らない。

貴族の女は、自分の短所を殊更隠そうとするものだ。

貴族では無い女も、喜ぶのは高価な贈り物だけだ。

サラサは、己の短所を認め、改善させようとする、素直さと勤勉さがある。

高価でも無い、しかも配慮に欠けた贈り物を、喜んでくれる。世界に一つの宝石を贈られた様に、心からの笑顔をくれる。

側室としては少々風変わりとは言えるが、そんなところが良いと思う。

サラサの傍は、酷く居心地が良い。

「…サラサ。」

「！」

静かな声で呼ぶと、彼女は弾かれた様に顔を上げる。

直ぐに入り口に立つオレを見つけ、パァッと表情を輝かせた。

「陛下！」

寝台からおり、パタパタと此方へ向かって来た彼女は、嬉しそうに顔を綻ばせてオレを見つめる。

「おかえりなさいませ。」

「…ただいま。」

後宮では、使う事の無い挨拶。

でも彼女に言われると、凄く安心する。

ほっと、漸く息がつける心地がするんだ。

テーブルに用意してあった酒瓶を引き寄せようとする彼女を制し、オレは寝台へと滑り込む。
何時もの様に、隣を空けてポンポンと合図を送ると、彼女は目に見えて赤くなった。

純粋無垢な様子に、暖かな気持ちが込み上げた。

「何もしない。眠るだけだ。夜が明ける前には帰るから…おいで。」

甘やかす笑みを浮かべ、手招きすれば、彼女は暫く悩んだ後、おずおずとやってきた。

真っ直ぐな黒髪をゆるりと撫でると、吊り上がり気味の漆黒の瞳が、オレを見上げる。

まるで臆病な子猫を懐かせようとしている気分だ。

抱き込んだ彼女の細い体は、甘く優しい香りがして、

気が付けばオレは、今までに無い位、深い眠りに落ちていた。

…サラサの香りには、癒しと睡眠導入の効果があるに違いない。

.

側室（仮）の願い。

最近、何故か皇帝は私の部屋で寝て行く。
なんの比喩でも、控え目な表現でも無く、本当にただ寝に来る。

今でこそ忠犬よろしく待っていますが、二回目に来た時は、驚きましたよ。

初夜失敗してるのに何で来たし。まさか仕切りなおし的な！？とドキマギしたものですが、完全なる自惚れでした…。

未だにチューさえされていない側室なんて、私くらいのものじゃなかろうか。

確かに私、色気ゼロですし。そんな気になれないのは当り前かもしれません……落ち込んでなんかいません。いませんとも。

……デリケートな部分なんで、そっとしておいてやって下さい。

最初に赤っ恥かいて妙な期待をバッサリ切り捨てられたおかげか、最近は素直に接する事が出来る様になりました。

皇帝の態度を見る限り、私を女として見ているというより、ペット感覚な気がするんですよね。

よく撫でられるし、しかも触り方が全くいやらしくない。絵本くれたし…あれ、子供扱い??

何より、意識している女性…しかも妻を、ただ抱き締めるだけで寝るなんて、健康な青年男子のする事じゃないでしょう。

皇帝の態度は、あれですよ…えーと……あ、アニマルテラピー。

気付いた時は、好きな人にペット扱いって…!!とショックを受けたりもしましたが、それでも好きなものは好きなんです。

元より、叶うはずの無い恋です。会えるだけでラッキーと思っておこうぜ私、と割り切る事にしました。

そう悟ってしまえば、もう怖いものはありません。

色っぽい方面の癒しは他の方にお任せして、ペットならペットの特権として思いっきり甘えさせていただきますよ。

それに割り切ってしまえば、ペットポジションってかなりおいしいのです。

撫でて貰えるし、ぎゅうって抱き締めて寝てもらえるし。寝顔も見

放題。

…あ、寝顔といえば、気になる事があるのですが。

皇帝は、他の方のところへ通っている時は、ちゃんと朝まで寝ているのでしょうか？

私のところへ来てくれる時は、深夜に来て夜明け前に帰ります。

それは恐らく一介のペットである私を寵妃だと、他の方に勘違いさせてしまわない為だと思いますが…彼の体が心配です。

私が他の方に嫌われてしまわない様に、他の方が傷付かない様に、配慮して下さるのは、とても嬉しいのですが、そんな事を繰り返していては、体が休まりません。

…やっぱり、早いとこ奥様方に仲良くなっていただかなければ。

無謀は承知。

ですが、私は私なりに、譲れないものがあります。

二回目に来て下さった貴方に、テンパった私が思わず『おかえりなさい』と言ってしまった時に、見せてくれた笑顔を、

安堵したような、無防備なあの笑顔を、護りたいというのは、分不相応な願いなのでしょうか。

・

側室（仮）の挑戦。

さて。

姫様同士を仲良くさせようと意気込んではみたものの、正直ノープランです。

脊髄反射で生きてます。すみません。

取り敢えず、姫様同士を仲良くする前に、私が仲良くなってみようと思います。

ほぼ面識の無い女に仲立ちされても、気持ち悪がられるだけな気がしますので。

いきなりアズミ様とか難易度高過ぎなので、大人しく優しいシャロン様にまずはアタック。

……べ、別に最初から狙ってた訳じゃないですよ？

細くて可憐でぎゅーっとしたら壊れてしまいそうなシャロン様萌え！！とか、私が男だったら土下座してでも嫁に来て欲しいとこだよね…とか、思ってないんだから！！

……すみません。わたくし嘘をつきました。

リアルお姫様に超キュンキュンしておりました。

シャロン様が侍女の皆さんとの会話中、控えめな微笑みが、はにかむ様に少しくしゃりとなるのを遠目に見た時から、仲良くなったら間近であれ見れるのかなー…と羨ましがってたりもしました。

ですが！！

私リサーチによると、シャロン様のご趣味は手芸！！詩をしたためる事！！うん無理！！

…だって私一番の苦手科目、家庭科な女ですよ？

課題の浴衣を必死に仕上げようとはしたものの、何故か袖から腕が出ないし、測った筈なのに丈はつんつるてんだし。先生涙目だったよ…。

詩の方は……うん。

たぶん中学二年生的なものならいける気がする。

非常に頭悪さげなものが出来上がる気がします。

あ、それ以前に私、字が完璧じゃなかった。

皇帝陛下に貰った絵本のおかげで、なんとか五歳児程度の読み書きは出来る様にはなりましたが。

あれ、絵が入ってるから非常に助かる。流石皇帝…分かってる！！でもつい口が滑ったとはいえ、貴族の子女が読み書きがイマイチとか…アリなの？私迂濶過ぎない？

……ま、まぁ、突っ込まれてないからセーフなんだよね？

で、話を戻しますが、趣味を介してシャロン様と仲良くなろう計画は、そんな訳で早々に頓挫しました。

私に女らしさを求めるのは、ペンギンに鳥らしさを求める位無謀だという事です。

うーむ。

腕組みをし唸っている私の前に、スッとティーカップが置かれた。

「…ありがとう、カンナ。」

「はい。」

優しい微笑みを浮かべるカンナにお礼を言い、紅茶を飲む。
…良い匂い。癒されるなぁ。

こっちの世界にもお茶があってよかった。残念ながら緑茶は無い様ですが。
発酵させずに飲む、という発想が無いのでしょうか。もしかしたら、貴族には知られていないだけで、地方を探せばあるのかもしれませんね。

「……お茶会とか、出来ればいいのに。」
「お茶会、ですか？」

私の独り言を拾ったカンナは、不思議そうに首を傾げる。

「うん。仲良くなりたい方がいるんだけど…」

苦笑してみたが、無理な事は私にも分かっている。
お呼ばれするならともかく、身分が下な私が主宰のお茶会に招くという事は、明らかに不敬。
侮って喧嘩売っている、ととられる可能性が高い。

仲良くなるどころか嫌われてしまいます…。

お茶会でなくとも、隣り合って会話が出来れば、仲良くなる為の糸口が見つかるかもしれないのに。…こういう時、身分ある立場って面倒だなって思います。

「…どなたと仲良くなりたいのでしょうか？」

「……え？」

少し沈黙し、思案する素振りを見せたカンナは、じっと私を見る。

「…シャロン様だけど？」

それがどうかした？と首を傾げる私に、カンナはニッコリと笑む。

「その方なら、お茶会を介さずとも、お近づきになれるかもしれません。」

「えっ！？本当？」

…そんな会話をした、次の日。

私は今、東屋近くの物陰に隠れております。

時間は早朝とも呼ばれる時間です。
後宮の規則で取り決められている、部屋を出てもいいとされるギリギリな時間なので、人影はほぼありませんね。

侍女の皆さんは、活動を初めてらっしゃいますが、側室の皆様の朝の準備に忙しく、東屋に近付く方は皆無です。

何故そんな場所にいるかというと…

「…！」

カツン、コツンと、ゆったりとした足音が聞こえ、東屋の方を窺うと…本当に来ました！シャロン様です！

カンナが教えてくれた通り、シャロン様がいらっしゃいました。
凄いな…カンナの情報網恐るべし。シャロン様のご趣味を調べてくれたのも実はカンナだったりします。

カンナって何者…？

モヤモヤしたものを抱えつつ、シャロン様へと視線を戻します。本日も美少女です。

「……。」

お一人で東屋に来たシャロン様は、懐から何かを取り出しました。ハンカチに何かを包んであるのでしょうか？此処からでは見えませんが。
それを広げたシャロン様は、小さく口笛を吹きました。

「……！」

すると何処からともなく、小鳥が数羽下りてきました。
シャロン様が差し出した白魚の様な手に、警戒無くとまります。

……成る程。餌付けしてらっしゃるんですね。

ハンカチに包んであったのは、パンクズか穀物的なものなんでしょう。

「……、」

ぼんやりとソレを見守っていた私は、いつの間にか見惚れてしまっていました。

朝の光を透かし、キラキラと輝くプラチナブロンド。
繊細な美貌に穏やかな笑みを浮かべ、戯れる小鳥を愛しそうに見守る様は、まるで聖女の様で、

その光景は、お伽噺の挿し絵そのものだった。

「……。」

ぽけっと見守ってしまった私は、ついつい引き寄せられる様に、一歩踏み出す。

――パキリ、と

足元で小枝か何かが割れた音で、私は我に返った。

しまった、と思ってももう遅い。

「……！」

バサバサッと鳥が飛び立ち、シャロン様は弾かれた様に私の方を見て、大きく目を瞠った。

「……あ、」

「！」

内心ダラダラと冷や汗をかきながらも、私はヘラリと笑い、彼女に声をかけようとしたが、

シャロン様は顔を反らし、逃げる様に駆けて行ってしまった…。

……なにしてるの自分。

.

皇帝陛下の困惑。

「……どうかしたか？」

またも深夜、忍んで訪れた部屋でオレを待っていてくれた少女に、オレはそう問うた。

何時も通り笑顔で、おかえりなさいと出迎えてくれたサラサの様子が、今日は少しだけおかしい。

嬉しそうな笑みも、オレのグラスに酒を注いでくれる仕草も何時も通りなのだが……何故か今日は、いつもよりも距離がある。

心の距離などとは言わない。武骨な男が、精神論など語るつもりは無い…物理的に、少し遠いのだ。

いつもは意識せずとも、柔らかで甘い彼女の香りを感じる位、戯れに伸ばした手が、容易く彼女の髪を絡め取れる位の距離なのに、サラサが意識的にあけたであろう、人一人座れる位の隙間が、酷く落ち着かない気分にさせる。

「……え、」

オレの問いに、彼女は目に見えて狼狽した。
ソレを見て、この隙間が彼女の意志である事を確信する。

「……サラサ？」

「……う。」

体を退こうとした彼女の、寝台に付いていた手を上から重ねる様に押さえ、距離を詰める。
至近距離で真っ直ぐに瞳を覗き込めば、頬が薄らと赤く色付いた。

「…オレが何かしたか？」

「……へ？」

「気付かないうちに、お前に不快な思いをさせてしまったか？」

「…え、は？」

オレの言葉に、ポカンと口をあけたサラサは、次いで戸惑う様に瞬きをする。

「そんな事、」
「…気を遣う必要は無い。嫌な事は、嫌と言ってくれ。」
慌ててかぶりを振るサラサの言葉を遮り、オレはそう続けた。
「オレは、気のきかぬ粗野な男だ。王族とはいっても、詩を諳じ楽を奏でる様な雅やかさなど欠片も持たぬ。……戦局は読めても、今お前が何を憂いているかは分からぬ情けない男だ。」
だからサラサ、嫌な事は嫌と言え。
でなければオレは、お前にどう触れたらいいか分からない。
そう、心のままに吐露すれば、サラサは愛らしい顔を、熟れた果実の様に真っ赤に染めた。
見開かれた目が戻るのに合わせ、眉も下がる。困り顔のままサラサは、上目遣いにオレを見る。可愛い。
「…陛下は、何もしてません。……これは私の問題なんです。」
ついつい引き寄せられる様に、サラサの髪を撫でようとしたが、サラサは顔を反らす事でそれを避ける。

……これで、何もしてないと言われてもな。

「……サラサ？」

若干、恨みがましい目付きになってしまった様だ。サラサは、うっ、と言葉に詰まる。
やがてバツが悪そうに、彼女はポツリと呟いた。

「……これは何と申しますか……えーっと、罰則？」

「……は？」

「私なりに、私の気を引き締める為に決めた条件と申しますか…。」

「……サラサ？」

意思の疎通を図る為、名を呼ぶが、サラサはすっかり己の思考に捕らわれているようで、ぶつぶつと呟いている。

「私はダメダメです。初戦敗退したダメ子なのですよ。次は同じ失敗をしない為にも、罰の意味で陛下断ちといいますか…」

「…オレ断ち？」

それは一体何だ。と目で問うと、キョトンと目を丸くしたサラサは、

「願いが叶うように、好きなものを断つ…ようは願掛けなのです。」

と、事も無げに言ってのけた。

意志薄弱な私は会う事まで断てませんでしたので…せめて接触断ちです。などと言う愛らしい猫を、

まったく。

どうしてくれようか。

.

02

「…サラサ？」

「……はい。」

「その願掛けは、オレの罰にもなり得るのだが？」

「……？」

オレを見上げてくるサラサの顔には、『何で？』と思いっきり書いてある。…馬鹿正直というか素直というか。

こんなにも顔に出やすいと、さぞかし生き辛かろうと心配になったが、この手の人間は味方も多いな、と思い直した。
現にオレは、出会ってまだ数ヶ月だというのに、無条件に近い信頼を寄せつつある。

こういう類（たぐい）の人間を裏切るには、相当の覚悟もしくは、相当の悪意が、必要だろう。

「……お前はオレの癒しだ。…折角会いに来たのに触れないというのは、少々辛い。」

「！」

我ながら、タチが悪い。何が少々か。

サラサの漆黒の艶やかな髪を指先に絡める様に一房掬い、引き寄せたそれに、チュ、と軽く唇を押しあてる。
覗き込んだ彼女は、真っ赤な顔のまま固まってしまった。

「…サラサ？」

間近で瞳を合わせたまま、口元だけで笑ってみせると、サラサは忙しなく視線を彷徨わせた。

…あまり虐めるのは可哀想だが、オレにも譲歩出来ないものがある。

「…願掛けは、他の事にしないか？」

「……。」

オレがそう提案すると、サラサは不服そうに眉を下げる。
小さく『一番じゃないと意味ない気がするのに』と呟いているが、

逆効果だとは分かっていないな。

…そんな風に真っ直ぐな好意を向けてくれる可愛いお前が隣にいて、触れられないなど…なんの拷問だ。

「…サラサ。」

「！」

意識的に声を低くし、耳元に囁く様に呼べば、抵抗していた可愛い猫は、あっさりと白旗を上げた。

「……分かりました…止めます。別方面のものにしますです…。」

しゅん、と項垂れた彼女の旋毛（つむじ）を見ながら、オレは満足げに笑む。

漸く得られた感触を堪能するべく、ゆっくりと手の平をサラサの頭に滑らせれば、直前まで暗い表情をしていたのが嘘かのように、サラサは嬉しそうに破顔した。

……可愛い。可愛いが…お前、オレがいないところで、誰かに騙されるんじゃないぞ。

自分のした事を棚に上げ、心配してしまった事は、彼女には秘密にしておこう。

「……ところで、サラサ。何を失敗したんだ？」

「……。」

思う存分撫で、満足したオレは、彼女が注いでくれた酒を飲みつつ、気になっていた事を聞いた。

…さっきは彼女に触れられるか否かに重点を置いてしまったが、何に対しての反省だったのかまでは聞いていなかった。

サラサは手元の酒瓶を両手で握り、僅かに俯く。

「……可憐な小鳥さんを、怯えさせてしまいました。」

「……。」

小さな黒猫が、鳥に戯れつく光景が頭に一瞬浮かんだ自分に呆れつつ、頭を振る事でソレを追い払った。

「…小鳥？」

「凄く繊細で、とても綺麗な小鳥さんです。…いくら仲良くなりたかったからって、物陰から忍び寄るのはダメです。というかきっと私の目が肉食獣ばりにギラギラとしていたのですよ。だから引いたんです。逃げちゃったんです。」

「……。」

…オレの目の届かないところで、この猫は一体何をしているんだろう。

内容はいまいち理解出来ないが、ズレた方向に一生懸命なのは分かった。

「……よくは分からないが、虐めようとした訳ではないのだろう？」

「勿論です！」

「なら、嫌われてはいないのではないか？」

「……そう、でしょうか？」

不安そうに表情を曇らせるサラサを、安心させる様にオレは笑った。

「敵意や害意が無い事が分かれば、時間はかかるかもしれないが、

いつかは打ち解けられるんじゃないか？」

「……はい。」

素直に頷き微笑むサラサを見ながら、オレはひっそりと苦笑を浮かべた。

サラサのいう『小鳥』が、比喩なのかそれとも言葉通りのものなのかは分からない。

…本物の野生の小鳥と仲良くなろうとする、などという突飛な発想が否定出来ないのが、サラサがサラサである所以なのだろうが…、

一体、何をし始めようとしているのか。

…本当にこの猫は、目が離せない。

.

側室（仮）の反省。

皇帝と、そんな話をした翌日。
またも早朝から東屋へ向かった。
……懲りないなぁ、って思うでしょう。
ですが一応、私なりに考えての事なのです。
シャロン様は、あのご様子からすると、数日は此処に近寄らなくなってしまうんじゃないかと思いまして。

「……。」

現に、いらっしゃいません。
前日の時間を、過ぎているにも関わらず。
…やはり、私が不用意に驚かせてしまったせいですよね。
近くの柱に手を突いて、項垂れそうになったのを堪え、私はぐっと前を向きました。

私が今やるべきは、反省会ではありません。それはまた今夜にでもやろうと思います。

今まず優先しなければいけない事は……

懐に手を入れ、ハンカチに包んだものを取り出す。
ジャジャーン！と効果音を入れながら。…勿論心の中でですよ。

これは何かと言いますと…カンナに用意してもらった穀物です。たぶん稗(ひえ)とか粟(あわ)とかそんな感じ。

私のせいで、シャロン様にご飯を貰えなくなってしまった小鳥さん達の朝ご飯です。

さぁ、おいでませ！

「……あれ？」

ジャジャーンと広げたまんまのハンカチを手に、私は立ち尽くす。

…朝なので、小鳥さんの囀りは聞こえてきますが、全く下りてくる

様子が無いですね……なんでだ。

「……うーん。」

一生懸命頭を捻り、昨日の光景を思い出してみる。

白く細い手を差し出し、手の平や肩で戯れる小鳥を愛でるシャロン様、マジ天使。

……ではなくて。

もう少し前……あ。

そういえば、口笛で呼んでました！

なるほどなるほど。

では！

「……。」

口を窄め、息を吐く私の唇からは、ヒュー…プスー…という何とも物悲しい音が洩れた…。
…そういえば、私、口笛吹けないんだった。

……なに？お前、なんなら出来るの？って顔で見ないで下さい！
例え口笛さえも吹けない裁縫も出来ない…ないない尽くしの団子蟲でも、生きているんだから一応！！

…自分で言って哀しくなりました。でも一応、私にも特技的なものはあるんですよ。
シャロン様みたいに女の子らしさを期待されると大変困りますが…

「……あの、」

あ、でもお掃除は好きです。雑巾の絞り方には定評があります。
窓掃除とか、ピカピカになっていく過程が超楽しいですよね…身長がチマいので、脚立は必須ですけど。

「……あ、あの…」

料理は…壊滅的に下手ではありませんが、上手とは言えませんね。
…何というか、とても微妙なものが出来上がります。

砂糖と塩を間違えるベタさは無いものの、ウスターソースとオイスターソースを…薄口と濃口醤油を等、地味なミスを繰り返す為、…食べられない事は無い…が、美味いとも言えない、という、大変反応に困る仕上がりとなります。

幼なじみの男の子にはよく、『お前の料理はじんわりマズい。』と評価されてましたっけ…。

「……あ、…あのっ！！」

「ひょっ…！？」

遠い目をして過去を懐かしんでいた私は、背後から大きめの声をかけられ、息を飲む。

…変な声が出ました。

バクバク早鐘を打つ胸を押さえながら、後ろを振り返ると、そこには…

白皙の美貌を、緊張の為か赤く染めた、

可憐な天使…ではなく、今日も可愛らしいシャロン様が立っておりました。

側室（仮）の提案。

「……。」

「……。」

私達は互いに無言のまま、暫し見つめ合った。

…ただしその様子は真逆です。

緊張で倒れてしまうんじゃないかという位、頬を赤らめるシャロン様。

…そして、そんなシャロン様をガン見する私。

だって、可愛い可愛いシャロン様が、こんな間近に！！しかも緊張で涙目なんですよ！？

そりゃガッツリ見るでしょう。こんな機会早々ありませんからね。

「……、」

ああ、可愛い…。
ピルピル震えている…多分此処で私が『わっ！！』とか大きな声を出したら泣いてしまうんじゃないかと思います。
……ああ、駄目よ沙羅。やってみたい…超やってみたいとか思っちゃ。

「……ぁ、の」

悶々としている私に、シャロン様は小さな声で話し掛けてきた。
それによって私は、危うい方向に行きかけていた頭を正常に戻す事が出来ました。

…危ない危ない。
仮にも側室でありながら、開けてはいけない扉を開けるところでしたよ。

「はい。何でしょう？」

ヘラリと笑みかけると、シャロンは漸く、少しだけ肩の力を抜いた。
よかった。近所のちびっ子相手に鍛えた『警戒心を抱かせないスマイル』が有効な様です。
私安全、コワクナイヨー。

「…昨日、此処にいらした方ですよね…？」

「……はい。」

シャロン様の質問に、今度は私が挙動不審になる。

誤魔化しようが無いから頷いたけど、変質者扱いされないよね…？

シャロン様は、少し躊躇った後、決意した様に面をあげた。

長い睫毛に縁取られた空色の瞳が、懇願する様に私を見る。

「……黙っていては、下さいませんか…？」

「……はい？」

……え？何を？？

予想外の言葉に、私はキョトンと目を瞠る。

だがシャロン様は、そんな私の間抜け面が目に入っていないのか、

泣きそうな顔で言葉を続けた。

「……餌付けなんて、してはいけない事は分かっているんです。…

侍女にも止められておりますし。」

…えっ！？駄目なの？
私いま、思いっきりやろうと思っていましたが。
ていうか今現在餌を持っているんですが。

自分の事に必死なシャロン様は、私の手元のハンカチが何を包んでいるかまで思い至らないようです。

「……規則には、」

「…規則には書いてありません。ですが、皆様が暮らしている場所で、その様な勝手は許されませんでしょう？」

控え目に口を挟んだ私に、シャロン様は力無い笑みを浮かべる。

「…私は王女とはいえ、辺境の国に住んでいた田舎者。…皆様が当り前に出来る事さえ聞かなければ分からない、常識知らずなのです。」

「……。」

悲しそうな表情には、諦めや卑屈さが混在していた。
予想でしかないけれど、それらの言葉は、此処にきてからシャロン様が、誰かに言われた事なんじゃないでしょうか。

少し外れた行動を、こうも恐れるのは、何かをする度に、誰かに嘲笑われたから。
所詮、田舎者と、影口をたたかれたからなのでは。

「……。」

規則に書いてないなら、いいんじゃないですか、と開き直るには、私くらいの図太さが必要ですからね…。
繊細で大人しいシャロン様には無理かもです。

……うーん。

どうしましょう。

「……あ。」

「……？」

…忘れていました。

東屋の欄干に、昨日シャロン様が餌をあげていた小鳥たちがとまったのを見て、私は手元の餌の存在を思い出す。

シャロン様から視線を外し、私は小鳥たちに向かって餌を差し出した。

……しかし当然の事ながら、近付いてくれません。

私無害。コワクナイヨー。

しょんぼりとしながらも、欄干に少しだけ餌を置いた。

そして離れると、小鳥の一羽がちょこちょこ近寄ってきて、それを啄む。

よかったー。

一羽、一羽と増えてゆき、みんなで私の餌を食べてくれる。

本物の小鳥さんは、警戒をといてくださった様。

「……。」

振り返ると、綺麗な青い瞳を瞠るシャロン様。

此方の小鳥さんも、警戒をといてくださると嬉しいのですが…。

私はもう一度、シャロン様にヘラリと笑い掛ける。

「…これで同罪です。」

更に大きく瞠られた瞳を見つめながら、『二人きりの秘密にしましょう』と小さく呟くと、

見開かれていた青空から、雨粒みたいな雫がこぼれ落ちた。

.

側室（仮）の発起。

「……美味しい。」

カンナの淹れてくれたお茶を飲み、ゆっくり深呼吸をしたシャロン様は、そう小さく呟いた。

「…よかったです。」

落ち着いた様子のシャロン様に、私も漸く安堵の息をついた。

もう涙は零れていないものの、目は充血しているし、目元も鼻の頭も赤い。

一目で泣いた事がバレてしまうシャロン様をお部屋に帰すわけにもいかないので、一時私の部屋に避難していただきました。

侍女の皆さんが心配してしまうので、言伝をカンナにお願いしたので、今は部屋に二人きりです。

「落ち着きました？」

「……。」

私の問いかけに、シャロン様はコクリと頷く。
カップを置くと、顔を上げ、じっと見つめていた私と視線を合わせた。

「…ご迷惑をおかけ致しました。」

ゆっくりと、だが綺麗な所作で頭を下げるシャロン様に、私は慌ててかぶりを振る。

「迷惑じゃないです！！寧ろ役得…じゃなかった…此方こそ驚かせてしまって。」

やっぱい本音がダダ洩れた。
言い繕う私をシャロン様は不審に思う事は無かったようで、穏やかな微笑を浮かべ『ありがとうございます。』と言ってくれた。

それから少し恥じる様に頬を染める。

「…子供みたいに泣いてしまって…驚かれたでしょう？」

「いえ！寧ろ激萌えた……ゴホン、…不安定な時くらい、誰にで

もあります。」

…うん、自重しようか私。

さっきから言動が変質者だから。なんか最近女子高生の皮を被ったオッサンになりつつあるから。

冷や汗をかきながらも、誤魔化す為にヘラリと笑むと、シャロン様は不思議そうに首を傾げた後、ニコ、と控え目に笑んだ。

「……私、此処に来てから、優しくされた事がなくて……あ、勿論侍女の皆は良くしてくれるんですが…対等に話して下さる方がいなくて……その、嬉しかったんです。」

「……！！！！！」

シャロン様は、僅かに俯きながら、はにかむ様にクシャリと相好を崩す。

不意討ちに見てしまった私は、思わず顔を真っ赤に染めた。

…へ、変態とか言っちゃダメです。

だって見たかった笑顔が、こんな早く、しかも間近で見れたんですよ！？

…ていうか、可愛いー…！！！！！

ガン見している私には気付かず、シャロン様は俯き加減のまま話を続ける。

旋毛も愛い↑

「…故国は、寒さ厳しい国でした。冬がとても長く、ほんの僅かな夏の間だけ訪れる渡り鳥はいましたが…あんな色鮮やかな鳥は、初めて見たのです。…だから、どうしても近くで見てみたくて。」

「…それで餌付けなさってたんですか。」

成る程。

確かに、鮮やかな鳥って寒い所にはいなそうなイメージだよね。

「……そんな事をしては、他の皆様の迷惑になるかもしれない、と分かっていたのですが、止められなかった。……私は寂しかったのかもしれません。」

「……シャロン様。」

「……ですから、あの……これからも、仲良くしていただけますか…？」

「勿論…！！！」

思わず私がこぶしを握り締めて断言すると、シャロン様のお顔が嬉しそうに綻ぶ。

ああもう何ですかこの子。ぎゅうってしたいぎゅうってしたいー！！！

「…良かった。…此処に来て初めて、優しい方にお会いしました。」

「えっ、そんな事ありませんっ！」

そんな、おこがましい！！

私なんて、側室の皮を被ったセクハラオヤジですよ！？

ぶんぶん首を振って否定する私を見て、シャロン様は、何かを思い返す様に、伏し目がちに微笑する。

「……私、此処がずっと怖かったんです。他の側室の方も、衛兵も侍女も、…陛下も。」

「陛下も…？」

私は、シャロン様の言葉に、瞠目した。

私の中の陛下は、とても誠実で優しい人。

何を怖がる事があるのだろう、と思う。

だけどシャロン様は、堅い表情のまま続けた。

「…王族に生まれたからには、政略結婚は当然です。…ですが、鴻帝に嫁ぐ心の準備は出来ておりませんでした。」

「……？」

鴻帝とは、鴻国の王を、他国の人間が呼ぶ別称、とは聞いていたけれど…何か違和感を感じた。

それは、発音的な問題だけじゃなくて……怯え、畏怖の様な。

「……。」

私は、この国の事を……いや、この世界の事を、何も知らない。

突貫的に詰め込まれた少ない知識だけでは、分からない事だらけだ。

シャロン様の国の場所も、
青い鳥の名前も穀物の名前も、

――シャロン様の、怯えの理由も。

「……。」

…いいえ。私は、頭では分かっている筈です。

シャロン様の国は、鴻国の藩属国だと教えられました。
その時に、頭の片隅で思ったじゃないですか。

…戦争があったのかな、って。

現代っこの私には、テレビ画面の向こうの出来事。
でも此処では、現実…そう現実なのです。

…目を逸らすのは、ダメなのですよ、私。

これを機に、学ばなければいけないのかもしれません。

・

02

思い立ったが吉日です。

私は早速、図書館に行く事にしました。

「…ふわー。結構大きいのですね。」

書庫に使われている建物を見上げながら、私は独り言をこぼす。

取り敢えず、勉強しようと思い立った私は、王宮内にあるであろう図書館を使えないかとカンナに相談してみた。

そうしたらカンナは、にっこりと笑いながら、『書庫でしたら、後宮内にもございますよ。』と教えてくれた。

なんでも、何代か前の皇帝が寵妃の為に建てたらしい。

他の建物に比べ華美さは無いものの、結構立派な造りで、蔵書量も中々のもの。

…ただし、利用者はほぼ皆無。側室の方々は、本に興味は無いようです。

大きな扉を押すと、ギィ、と重々しい音をたててゆっくりと開く。

「…お邪魔します。」

誰に向けるでも無く呟いて、室内へと身を滑り込ませた。

「……。」

ほぼ利用者がいないと聞いていたが、ちゃんと掃除は行き届いている様で、埃っぽさは無い。

少し冷えた空気に、本独特のにおい。シンとした空間は、扉一枚隔てただけなのに、まるで外界から隔絶されたかのような雰囲気があった。

――カツン、

自分の靴音が、静かな室内にやけに響く。

いくつも並ぶ棚の一つに近付き、最近身につけたばかりの拙い語学力で何とか背表紙の文字を読んだ。

えーと……礼儀作法…は、まだいいや。
…香とかも今はいいです。

…取り出す、地図が見たいんだけどなぁ。

後、歴史書とか。

私レベルに落としてくれてあると尚よし。『よくわかる鴻国の歴史』とか『教えて偉い人』みたいなの。

……え、ある訳無い？？

いやいや。皇帝のお子さんだって、初めは後宮にいるわけですし、あるかもですよ。

「……。」

背表紙の文字を追いながら、私は奥へと進む。

カツン、コツン、と足音を響かせながら。

「……歴史、…歴史。」

ブツブツと独り言を繰り返しながら、私は必死に本を探していた。

「……歴史、」

「歴史書なら、」

「…っ！？」

ふいに、私の独り言に返事が返った。

何の覚悟もしていなかった私は、驚きに一瞬息を止める。

「…歴史書なら、その左隣の棚よ。」

割り込んだ声は、落ち着いたアルトボイス。

静かで凛とした…まるでこの書庫の様な声の主人を探すべく首をめぐらせると、

その人は、一段高い場所から私を興味深そうに見ていた。

キッチリと纏め結い上げられた黒髪と、理知的な美貌。派手さは全く無いが、趣味の良い落ち着いた装い。

……なんですか、この知的美人さんは。

呆然と見上げる私を、美人さんは、上から下まで眺め、ふぅん、と意味ありげに頷く。

薄紅色の唇が、ゆるりと口角を上げ、魅惑的な微笑を浮かべた。

「……此処に、皇帝の寵以外を欲する女がまだいたのね。」

「……え？」

首を傾げる私に、美人さんは、あら、と同じ様に首を傾げた。

「…それとも、皇帝の寵愛を受ける術（すべ）でも学びにきたのかしら？」

その言い方には、明らかに刺があった。

声も、敵意はないものの、決して好意的とは言い難い。

…なにやら、返事が遅くなった事で嫌われてしまったのでしょうか。

少し残念に思いつつも、私は正直に答えを返した。

「…よくは分かりませんが、皇帝陛下の寵は欲しいです。」

「……。」

私がそう返すと、美人さんは興味を無くした様に冷めた目になった。本格的に嫌われてしまったようです。

ですが、いいえと言えば嘘になります。

「私は陛下が大好きなので、陛下にも好きになっていただきたいと思っていますので。」

「……え？」

美人さんは、私がそう付け足すと、何故か吊り上がり気味の瞳を瞠った。

……私は何か、変な事を言ったでしょうか？

目を見開いたまま私を見つめる美人さんに、内心首を傾げつつも、私は彼女に向かって頭を下げた。

「ですが、今必要なのは歴史書なのです。…場所を教えて下さって、ありがとうございました。」

「……。」

長い沈黙が落ちる。

お礼が言えてスッキリした私が、顔を上げると、なんともいえない顔をしていた美人さんは、小さくポツリと呟いた。

「……変な子。」、と。

.

03

「何が知りたいの？」

私の阿呆さ加減に毒気を抜かれたのか、美人さんは呆れた様に嘆息した後、私にそう投げ掛けた。

階段を下り、私の隣に立った美人さんは、私の返答を待たずして、本棚から本を抜き取って行く。

「鴻国の歴史でいいのよね？時代によって本がわかれているから、触りだけ知りたいのなら、この辺りがいいと思うわ。逆に詳細に知りたいのなら、これね。お堅い文章だけれど、史実に沿って書かれているから、変な偏りが無くていいの。…この辺りは面白いけれど、推測が織り交ぜてあるから暇潰し程度に止めておくことね。」

「ご、ご丁寧にありがとうございます。」

耳に心地よいアルトボイスが、流暢に響く。

まるで司書の方の様に、求めていた以上の説明を与えてくれる美人さんに、私は吃りながらもお礼を述べた。

「…で？どの辺り？」

にっこりと笑みを浮かべる美人さんは、まるで水を得た魚の様に生き生きとしている。

…本が、とても好きなんですね。

年上の女性に、可愛らしい、なんて失礼でしょうか。

ヘラリと笑み返しながら、私は答えた。

「……えっと、初めから通して知りたいのですが、…一番知りたいのは今、でしょうか。」

「…今？」

「はい。…少し前から、今に至るまで…現皇帝陛下が、どの様に生きてこられたのかを。」

「……。」

私の言葉に、美人さんは驚きと呆れが入り交じった様な顔をした。

「…陛下の事が好きって、本当なのね。」

「はい。」

美人さんは、迷い無く頷いた私をじっと見たが、やがて理知的な美貌に苦笑を浮かべながら、手元の本を棚に戻した。

「……確かに、魅力的な方だわ。皇帝という地位を差し引いても、女なら一度は抱いて欲しいと夢見るかもしれないわね。」

…何でしょう。
誉めている筈なのに、美人さんの言葉はとても客観的で冷静です。
まるで、その括りの中に、自分はカウントしていないかの様に。

不思議に思いつつも、その大多数の女性の枠に納まっている私は、素直に頷いた。

「そうですね。とてもお優しいですし。」

「…え？」

本を棚に戻していた美人さんは、一拍置いて訝しむ様な声とともに、私を振り返る。

硬質な光を宿す瞳が、品定めをするように私を見た。

「……そういえば貴方、陛下の事を知りたいと言っていたわね。……現時点でどれくらいの知識があるのかしら。」

「……。」

言われて私は戸惑った。

私がサラサの実家で教わった知識の中に、陛下に関する事は殆ど無い。

それは箱入り娘であった本物のサラサ自身が、政治や王族に関する知識をほぼ持たないから、と説明されていたが…今となっては、意図的に隠していたのではないかとさえ思う。

そしてその隠された意図が、シャロン様の怯えや、美人さんの驚きの示すものなのではないかと。

「……、」

「……呆れた。貴方のご両親は、貴方を箱にでも納めていたのかしら。」

私の沈黙に答えを読み取った美人さんは、ため息をつき、肩を竦めた。

「…でも、だからこそ、そんなに真っ直ぐ慕えるのね。」

「……。」

…私は、何も返す事が出来ませんでした。
無知な私は、此処で否定するだけの材料を持ちません。
そんな事無い。陛下の何を知ったって、私はあの方が好き。…そんなのは、ただの理想論です。目を逸らしているだけです。

知ってからでなければ、私は胸をはって、好きだと言い切る事も出来ない。

「……。」

棚に本をしまい終えた美人さんは、俯いた私を見て、暫し何か考え事をしていた。

そしてしまった本の代わりに、彼女は一冊の本を取り出す。

無言で手渡されたソレを開くと、それは…

「……地図？」

「…貴方、時間はある？」

「…はい。」

「じゃあ、私が簡単に教えてあげるわ。」

「……え、」

驚きに目を丸くする私に構わず、彼女は話を進める。

曰く、長くなるから、既存の歴史書は今はいい。

もし興味があるなら、後で自分で読みなさい、との事。

「…いいんですか？」

戸惑う私に、美人さんは形の良い魅惑的な唇を、吊り上げた。

「いいわよ。これはただの好奇心。知識を得た後でも、その真っ直ぐな愛情が歪み無くいられるのか……そんな、質の悪い知識欲だから。」

美人さんの言葉を聞きながら、私は無意識に、手のひらを握り締めたのでした。

・

側室（仮）の勉強。

「鴻国の歴史は、侵略の歴史。」

書庫の一角に設置されていたテーブルに地図を広げると、美人さんはそう語り始めた。

クリーム色の紙に書かれた地図は、やはり私には見覚えの無いもので、此処が異世界である事を改めて感じる。
地図に描かれているのは、犬の横顔のような形の大陸が一つ。そしてその鼻先から口の辺りにかけて、大きめ島が二つ。

小さな島を除けば、描かれているのはそれだけ。
この世界に大陸が他には無いのか、それとも航海の技術が発展していない等の理由で発見されていないのかは、判断がつかない。

「この国は、初めは小さな国だった。…鴻国の前身は、大陸の南方にあった国『采（さい）』。農業が盛んな小国にすぎなかったわ。」

美人さんは犬の下顎の辺りを指差し、この辺りね、と指先で小さな円をかいた。

「その小さな国は、ある日襲撃を受けた。…襲ったのは、故郷を持たない流浪の民『鴻』。一族の大半の人間が傭兵などを生業としていた、戦闘部族相手に、農業国に勝ち目など無く、『采』はあっさりと滅びたそうよ。」

「……それじゃあ、鴻国を起こしたのは、」

「そう。王族全員を処刑し、新たな王として立ったのは、侵略した部族の長。国名を部族の名と同じ『鴻』と定めた男が、鴻国の始祖よ。」

美人さんが言った通り、鴻国の歴史は侵略の歴史だった。

戦闘に特化した部族が治める国は、次々と戦争をおこし、周辺諸国を飲み込んでアメーバの如く国土を広げていったそうだ。

サラリと説明された美人さんの言葉は、シンプル故に包み隠さず、全編通して実に血なまぐさかった…。

今の鴻国の国土は、大陸の約三分の一。
現時点では戦争は無いものの、数年前までは争いがあったらしい。
鴻国の北に位置し、険しい山を挟んだ隣国である『レダ』は、シャロン様の母国。先の戦争で鴻国に敗れた国と同盟を結んでいた為、終戦後、鴻国の藩属国となったという。

……シャロン様が、怖がるのは無理のない話でした。
負けた国のお姫様が、元敵国へ嫁ぐ。…それは想像以上の恐ろしさでしょう。

「ちなみに、『レダ』の同盟国『カイロア』を滅ぼしたのは、現皇帝陛下よ。」

「……え……？」

私は、目を大きく見開いた。
ついでの様にあっさりと告げられた言葉に、何の対処も出来ずに、ただ呆然とする。

「戦争を起こしたのは先帝であるあの方の父君だけれど、指揮をとり、戦の勝利を掴み取ったのは、現皇帝陛下。」

皇太子でありながら前線で指揮し、馬を駆り敵を屠る彼の人を、自国の民は『軍神』と、他国の民は『死神』と呼んだという。

個人の能力もずば抜けているが、戦略を練り人を動かす事に長ける彼は、指揮を任された戦い全てを勝利へと導き、鴻国の発展に多大な貢献をした。

…自国から見れば、ヒーローであり守り神であっても、他国から見れば、侵略者で略奪者。

呆然としたままの私を一瞥し、美人さんは、地図をパタンと閉じた。

「…通り過ぎた後に血の道が築かれる、血塗れの『紅帝』。……お嬢様の初恋相手としては、少々厄介すぎやしないかしら？」

「……私は、」

「…貴方が優しいと感じたあの方の手は、沢山の人間の血に塗れているわ。…直接的ではないかもしれないけれどその中には、貴方位の女の子や、小さな子供のものも、含まれている。」

「……、」

一言も発しなくなった私を、美人さんはじっと見ていた。
質の悪い好奇心、と言っていたのに、その瞳は、思慮深い光を宿している。

「……あの方は、貴方の手に負える様な方ではないわ。」

背負いきれないのなら、聞かなかった事にするのも選択肢の一つよ。

そんな言葉を聞きながら、私は握り締めていた手をゆっくりと開き、手の平を見つめていた。

.

側室（仮）の葛藤。

「……。」

…パラリ、

室内に、本のページを捲る渇いた音だけが一定間隔に響く。

私は灯籠を窓辺に置き、分厚い本を黙って読んでいた。

もう、どれ位そうしていたでしょうか。

気遣わしげな声が、かけられました。

「……サラサ様。」

「……え？」

呼ばれた声に鈍く反応し、ぼんやりと、顔を上げると愛らしい顔を心配そうに歪めるカンナと目が合った。

「……カンナ、」

「……夜も大分更けてまいりました。今日はもうお休みになってはいかがでしょうか。」

「…もう、そんな時間なんだ。」

本を読み始めた時には、オレンジ色から藍色のグラデーションだった空はもう真っ黒で、雲一つ無い夜空に浮かぶ月は大分高い位置にあった。

何時間こうしていたんでしょう。

拙い語学力ながらも、大分読み進めた本に手作りの栞を挟み、小さく息を吐き出した。

体のあちこちが固まり、動かすとコキコキと音がする。伸びをして体の強張りを緩和させると、カンナに向かって頷いた。

「…分かったわ。…遅くまでつきあわせてしまって御免なさい。」

「いいえ。」

優しい微笑を浮かべ、おやすみなさいませ、と頭を下げたカンナは退室した。

「……。」

本を丁寧に引き出しに仕舞い、灯籠を持って寝室へと移動する。ベッドサイドに置かれた台にそれを置くと、行儀悪くも、寝台に転がる様に体を投げ出しました。

「……。」

大分見慣れてきた白い天井を見上げ、両手を突き出す。

同じ年頃の少女と比べると、節樗(ふしくれ)立った醜い手です。白くはあるものの、少女らしい柔らかさの無い手。

…それでも、この世界の市井の少女らに比べれば、苦労の無い手だと思います。

実際、苦労した事などありません。

家事は母がやってくれていたし、アルバイトもした事が無い。

友達と喧嘩はしたけれど、すぐに仲直りするし、不器用に心配してくれた幼なじみもいた。

命の危険なんて、遠い世界の出来事でした。

「……。」

戦争なんて、未だに実感が無い。実際この世界に迷い込んでからも、私に身の危険が迫った事など無く、こうしてぬくぬくと、何不自由無く守られている身分です。

戦争の怖さが、本当の意味で分かる筈無い。

…それでも、考えてみた。

『陛下』が戦争で他国を滅ぼした、と聞いても実感湧かなくとも、もし、目の前に『殺人者』がいるのだとしたら、空想だろうと夢だろうと、私は恐ろしいと感じるだろう。

……私は、陛下が怖いのでしょうか。

優しく私の髪を撫でてくれるあの手が、幾多の命を刈ったと知って、触れられる事を嫌悪するのでしょうか。

あまり上等では無い私の脳ミソが、パンクしそうです。

…本当に私はダメ子ですね。

今更そこに…『陛下が好きで、陛下の為に何かしたい』という大前提がブレるとは思いませんでした。

何があっても好きだと言い切れる程、私はあの方の事を知らないのです。

…カタン、

「……っ、」

グルグルと考え込んでいた私の耳に、小さな物音が飛び込んできた。慌て私は、身を起こす。

…キィ、

次いで、静かに扉を開ける音。

…こんな深夜に、此処を訪れる方は、一人だけ。

暗殺者や泥棒さんが、わざわざ音をたてるとも思えませんし。

こんなぐちゃぐちゃな気持ちのまま、私はあの方に会う事になるようです。

「……。」

寝台の上で俯いた私の耳に、美人さんの言葉が蘇った。

『背負いきれないのなら、聞かなかった事にするのも選択肢の一つよ。』

「……、」

「……サラサ、起きているか？」

扉ごしに、控え目な声をかけてくれる陛下に、私は、顔をあげる。

なんの心の準備も出来ていません。正直、今は会わない方がいいんじゃないかとも思いました。

…でも、頭の出来の良くない私は、会わないままではさっきまでの様に、悶々と悩み続けるでしょう。

きっと答えは出ません。
なにを予想したところで、予想は現実では無いのです。聞かなかった事にしても、同じ。現実は何も変わらない。

――ねぇ、わたし。
考える事が無駄なら、
会ってから、決めましょう。

私は寝台の上で居住まいを正す。
正座し、膝の上に手を添えた私は、『はい。』と返事を返す。

ゆっくりと扉が開いて、薄明かりの中でも雄々しい美貌の主が、姿を現した。

「……サラサ？」

寝台の上にいる私を見て、切れ長な瞳が瞠られる。
切腹する武士みたいな姿の私が、おかしかったんだろう。不思議そうに首を傾げる皇帝を、私はじっと無言で見つめたのだった。

02

「……サラサ？」

何時もと違う私に、皇帝は戸惑った様にもう一度名前を呼んだ。

「……。」

ゆっくりと近付いてきた皇帝は、私の近くに腰をおろす。
間近で覗き込まれ、ゴツゴツとした大きな手が、私の頬をゆるりと撫でた。

「……っ、」

「……？」

息を飲む私に、皇帝は益々訝しむ様な顔になった。
でも私は、自分の事に精一杯。陛下を気遣う心の余裕がありません。

何かを感じ取ったのか、彼は、私の頬から手を離した。

「……。」

沈黙が、落ちる。

何時もの穏やかな静けさでは無く、限りなく気まずいソレを、気に掛ける事も、今の私には出来ません。

ああ、どうしよう。

どう、しましょう。

「……サラ、サ」

陛下の声が、低く擦れる。

胸につかえた何かを無理矢理飲み込んだかの様な、途切れがちの声に陛下を見れば、彼の顔は強張っていた。

初めて見る、怖い顔。

初めて聞く、怖い声。

今まで意識しておりませんでしたが、夜着の間から覗く肌には、沢

山の傷があります。

大きいもの、小さいもの。古いものに、新しいもの。

多分、着物を脱いだら、もっと沢山…身体中にあるのでしょう。

この方の、戦いの歴史が。

「……。」

書物の中の出来事だった、美人さんのお話が、急に現実味を帯びる。

壁に立て掛けられた、陛下の剣が赤く染められた事は、たぶん一度や二度では無いのだ、と、

漸く私の頭が、理解した。

……嗚呼、それなのに。

「……陛下。」

「……、」

呼ぶと、身構える様にビクリ、と体が跳ねた皇帝を見つめながら、私は

ゆっくりと、頭を下げた。

「……おかえりなさいませ。」

「…っ！」

息を詰める音がして、顔をあげた私の目に、驚き顔の彼がうつった。

何時もの様にヘラリと笑うと、彼の強張りが、だんだんと解けていく。

「……ただいま。」

陛下の整った顔が、泣き笑う様に歪む。

長い長い息をついて、噛み締める様に呟くこの方が、私は愛しい。

――そう。愛しい。――――愛しいの。

この方を想う気持ちは、1ミリだって減らなかった。

私は、私が思う程、高潔な精神をしていないようです。寧ろ非道です。

見た事の無い幼子の未来を憂うよりも、この方の、痛みを取り除いてあげたいのです。

会った事のない少女の命を悼むよりも、この方の心を癒したいのです。

安堵した様に私の肩口に凭れる陛下を見つめながら、私は笑む。

「……陛下。」

「…ん？」

胸に走る痛みは、今は飲み込んでしまいましょう。

正義感も罪悪感も、今はいりません。

ちっぽけな私の手では、救えるものなんて、ほんの少しなのです。

あれもこれもと手を伸ばして、全て溢してしまうよりは、

今は、無防備に笑ってくれるこの方を、護りましょう。

「お疲れでしょう…膝枕、如何ですか？旦那様。」

「……は？」

ポンポン、と正座したままの膝を叩くと、皇帝は目を丸くする。
呆気にとられた顔は、いつもより幼く見えた。

「……。」

戸惑ったように視線を彷徨わせた彼は、口元を手で覆いながら、横を向いてしまった。

「…陛下？」

「……、」

「…お嫌でしたか？」

「……いや。」

暫く間をあけて、漸く此方を向いてくれた陛下の顔は、少し赤かった。

「…嬉しいよ。……だが、その…照れる。」

「膝枕がですか？」

横になり、私の膝に頭をのせた陛下は、照れながら苦笑を浮かべた。

「膝枕もだが……旦那様、というのが。」

「……、」

15？人も奥様がいながら、何ですかそれは。

唖然とした私を、下から見つめていた陛下は、口元を緩め、苦笑を穏やかな微笑へと変える。

伸びた武骨な手が、スルリ、と私の頬を撫でた。

「…照れる…が、……嬉しいものだな。」

「……そうですか。」

瞳を細める陛下と同じ様に、私も自然笑顔になったのでした。

皇帝陛下の葛藤。

――息が、止まるかと思った。

今日も遅くにサラサの元を訪れると、彼女の様子がおかしい。

いつも満面の笑みでオレを出迎えてくれるサラサは、少し強張った顔で戸惑う様にオレを見る。

オレが傍へと行っても、彼女は笑顔を見せてくれないし、薄紅色の唇からは、『おかえりなさい』の言葉がこぼれ落ちる事はなかった。

隣に腰をおろして、サラサの柔らかな頬を撫でると、ビクッと跳ね、益々表情が固くなった。

「……。」

それが駄目押し。

今日のサラサは、オレを拒んでいる。

そう理解した瞬間、指先から凍り付く様な恐怖を感じた。

「……サラ、サ…」

無様に擦れた声は、自分のものでは無いようだった。
こんなにも動揺する自分を、みっともないと思う余裕すら無い。

何故だ。何故オレは、彼女に拒絶された。

昨夜訪れた時は、何時も通りだったのに。
ニコニコと笑いながら、友達が出来たと教えてくれていたのに。

……友達？

…まさか、誰かが何かを吹き込んだのか？

サラサは初めて会った時は、緊張して少し怯えていたが、それはオレにというより未知の行為に対してだった様に思う。現に、何もしないと分かると、それは愛らしい笑顔を見せてくれたから。

もしかしたらこの娘は、オレの事を何も知らないのかもしれない。

父母に甘やかされ、血なまぐさい話は遠ざけられてきたのだろう。

だから、こんな笑みを見せてくれるんだ。

そう結論付け、ならばこれからも何も知らせない様にしようと思った。幸い後宮の女どもは、美容と流行りの衣裳の事しか頭に無い。数人その枠から外れる者がいるが、それらは下世話な噂話に興ずる類いでは無かった筈。また、望まれもしないのに知識をひけらかす様な者もいない。

オレが片鱗さえ覗かせなければ、彼女はずっと、この無防備な笑顔を見せてくれるだろう。…そう、油断していた。軽く考えていたのだ。

この結果がこれだ。

「……、」

怒気を洩らしては、更に彼女を怯えさせるだけだ。

そう頭では理解していても、止められない。

誰だ。

誰がオレの大切な場所を奪おうとしている。

誰がサラサをオレから取り上げようとしているんだ…！！

「……。」

険しくなっているであろうオレの顔を、サラサはじっと見ていた。

「……陛下。」

「……っ、」

静かな声が、オレを呼ぶ。

そこに怯えは感じられないが、無表情のままの彼女の心が分からない。

拒絶されるかもしれない。

…もしサラサから明確な拒絶を受けたのなら、オレは一体どうするのだろう。

そう、身構えていたオレに、サラサは、ゆっくりと頭を下げ、

「…おかえりなさいませ。」

そう、告げた。

予想もしていない言葉に、一瞬何を言われたのか理解出来ず唖然となるオレを見て、サラサは何時も通りの愛らしい笑顔を浮かべた。

安堵に体から、力が抜けそうになった。
詰めていた息を吐き出し、深く吸い込む。情けなく顔が歪むのを止められない。

なにが軍神だ。なにが死神だ。
たった一人の少女に嫌われる事を怖れる男が、神になどなれる筈が無い。

「……ただいま。」

失わずに済んだ幸福を確かめる様に、彼女の肩口に頭を凭れると、彼女は穏やかな笑みを向けてくれた。

しかし次の瞬間、オレは再び固まる事となる。花びらの様な唇がこ

ぼした発言によって。

「お疲れでしょう…膝枕、如何ですか？旦那様。」

「……は？」

顔をあげ凝視するオレを見ながら、彼女は柔らかそうな膝をポンポン、と叩く。

膝枕…も衝撃的だが、彼女の口から今、旦那様と…

「……っ、」

だらしなく緩みそうになる口を隠し、顔を背ける。
ただでさえ情けない顔ばかりみせているのに、これ以上は嫌だ。

チラリと窺うように彼女を見ると、不思議そうな顔で彼女は、『お嫌でしたか？』と小首を傾げる。

…嫌な訳が無い。寧ろ、とても嬉しい。

「…嬉しいよ。……だが、その…照れる。」

「膝枕がですか？」

キョトンと目を瞠る彼女に苦笑を向けながら、オレは申し出に甘える様に彼女の柔らかな膝に頭をのせた。

「膝枕もだが……旦那様、というのが。」

正直に答えると、何を今更、といいたげな瞳が返される。

雄弁な瞳を愛しく思いながら、そっとサラサの頬に手を伸ばせば、今度は拒まれなかった。

スリ、と猫の子の様に擦り寄る様が可愛い。

「…照れる…が、……嬉しいものだな。」

「……そうですか。」

穏やかな微笑を浮かべ、幼子にする様にオレの髪を梳く彼女に、胸が暖かくなる。

サラサ…オレの事など、なにも知るな。

どうか何も知らないまま、ずっとオレに微笑んでいてくれ。

オレは、祈るように、そう思った。

側室（仮）の報告。

キィ…、

先日の様に、書庫の扉を潜った。
今日の天気が薄曇りな為、室内はこの前より薄暗かった。少し湿気も感じる。

本に湿気は大敵ですが、この世界では何か対策を講じているんでしょうか、と関係無い事を考えながら奥へと進んだ。

カタン、

予想通りその方は、この間と同じ場所にいた。

本棚の前に立ち、分厚い本に視線を落とす横顔は、とても綺麗です。

伏し目がちの瞳に影を落とす長い睫毛。彫りの深い目鼻立ちに、手触りの良さそうな肌理の細かい象牙色の肌。
元の私の世界のモンゴロイドの特徴を持ちつつも、欧米系の顔立ちともいいましょうか。

…あ、ちなみにシャロン様は、完全にコーカソイドですね。この世界に人種の括りがあるかは分かりませんが。

「……この前の話の続きをしにきたのかしら？」

「！」

ぼんやりと私が見つめていると、美人さんは此方を見ずにそう言った。

パタン、と手元の本を閉じる。

どうやらとっくに、気付かれていたようです。

高い場所から私を見下ろす美人さんは、面白がる様子は見受けられません。

静かな瞳はただ、じっと私の出方を待っています。

「……はい。」

私は真っ直ぐに美人さんを見据え、はっきりと頷いた。

「……。」

本を棚に戻し、美人さんは靴音を鳴らし階段を降りてくる。

…カツン、

私の前に立った美人さんは、腕を組み、私に視線を合わせた。

「……それで？恨み言なら聞かないわよ。知りたいと言ったのは、貴方。」

「……？」

報告をしようと思った私は、思ってもみなかった事を言われ、首を傾げた。

…恨み言？

なにを恨むのでしょう。確かに知りたいと言ったのは私で、美人さんは教えて下さっただけです。

それに美人さんが教えてくれなくとも、私は知る事になったでしょう。私は此処へ歴史書を探しにきたのですから。

寧ろ分かりやすく説明して下さった事に、お礼を言うべきでしょう。

うん、そうです。

「…教えて下さって、ありがとうございました。」

「…っ、」

あれ？この前もこんな事があった気が…デジャヴ？
頭を下げ、そんな事を考えていると、息を飲む音がした。

顔を上げると、美人さんは困惑した顔をしていました。大人っぽい美女なのに、頼りなげなその表情は、迷い子の様です。

「……何故？」

「……はい？」

突然、何故？と言われても困りますね…何のお話でしょう。

「…知らなければ良かったとは思わないの？」

「思いません。」

「……即答ね。」

美人さんは、苦く笑む。でも歪んだその笑みは、私を嘲笑うというよりは、自分に向けた…そう、自嘲に見えました。

「…好きな人の事です。例えどんな内容でも、知らないよりは知っていた方がいい。」

「知らない方が幸せ、という事も、世の中には沢山あるわ。」

「…そう、ですね。…それはあります。でも、コレは違う。これは、知らなければいけない事なのです。」

どう伝えたら、上手く伝わるのかは分かりません。
ですが私は、まとまらない思考のまま、懸命に言葉を紡いだ。

「知らないまま陛下を慕っている方が楽です。幸せです。…ですがそれでは、きっと歪む。」

耳を塞ぎ、目を背けていては、私はきっと大切な方さえ見失ってしまうでしょう。

そんな私じゃあ、あの方は護れないのです。

「私は胸を張って、あの方を好きだと言いたい。…それだけです。」

「……、」

美人さんは、拙い私の言葉を最後まで聞いて下さいました。

……よく考えなくとも、随分恥ずかしい事を言ってしまいましたね。

今更照れ臭くなって、じっと見つめてくる瞳に、私はヘラリと笑いかけた。

「…以上、報告でした。」

「……報告？」

美人さんは、私の言葉を不思議そうに繰り返す。

パチパチと瞬く仕草が可愛らしいです。

「…美人さん、言ってらしたじゃないですか。好奇心で知識欲だって。」

「……貴方、」

長い沈黙の後、美人さんはフハッ、と吹き出した。…クールな美人が、……台無しにならないところが凄いな…。

爆笑していた美人さんは、笑いすぎて滲んだ涙を拭いながら、私に向けてこう言った。

「…本当に、変な子ね。」と。

.

側室（仮）の交流。

「…え、えと…その……ご一緒に、お茶でもいかがでしょうかっ？」

「……。」

扉を開けた格好のまま、私は数秒固まった。

…固まるでしょう。固まりますとも。こんな、私の妄想を具現化したのではないでしょうか？と言いたくなる様な可愛らしい子がおりましたら。

朝食のおかわりまでしたのに、また夢の世界に迷い込んでしまったのかと思いました。

ああもう…顔を真っ赤にして、そんなプルプル震えて…何処の天使様が迷い込んだのかと…。

あまりのシャロン様の愛らしさに、私がうっとりと見惚れていると、シャロン様は何を勘違いしたのか慌てだした。

「……やはり、直接お誘いするのは…失礼ですよ、ね……ごめんなさ…」

「シャロン様。」

「…は、はい…？」

慌てたかと思えば、ショボンと俯くシャロン様を、私は真顔で遮った。

「抱き締めてもいいですか？」

「……え、……え？？」

「ぎゅうっとしてもいいですか。いいですよね。」

「…ええっ？は、」

答えを聞かずに、私はシャロン様をきゅうっ、と抱き締めた。

シャロン様が真っ赤になってワタワタしているのを見て、少し反省しました…だが後悔は無い。

だって超いい匂いする…！！柔らかい…髪サラサラ……いつも思いますが、私シャロン様といると、越えてはいけない壁を乗り越えそ

うになります。

おっとこの位にしておかなければ衛兵を呼ばれてしまいますね。

少し残念に思いつつも、そっと離すと、シャロン様はリンゴの様に真っ赤な顔で私を見ていた。

「申し訳ありません。…シャロン様が、凄く可愛らしかったので。」

「……わ、わたくしが、ですか…？…そんな事、」

戸惑った様な照れ顔もまたキュート…！！

一頻り、そんなシャロン様を愛で満足していると、少し落ち着いたシャロン様は、

俯き加減で視線を彷徨わせながらも、最後にとんでもない爆弾を投げつけてきた。

「……ですが、…その、嬉しかったです…。」

「……！！！」

……吐血しなかった私を誰か誉めて下さい。

「…本当に、私もご一緒してもよろしいんでしょうか？」

書庫の前に辿り着いた私が、扉に手をかけると、シャロン様は不安そうに私を見た。

一緒にお茶をしましょう、とのシャロン様の誘いに即座に頷きたかった私ですが、先約があるのでそうも行きません。

ですが、折角勇気を振り絞り私を誘いに来て下さったシャロン様とこのまま別れるのも寂しい…なら、一緒に書庫へ行きませんか、と誘ったのでした。

「大丈夫。美人さん…アヤネ様はお優しい方ですから。」

そうそう。

先日漸く、美人さんと互いに自己紹介をする事が出来ました。テンパって名乗り忘れていたのです…なんたる事。

「本にのめり込むと、たまに存在自体忘れ去られたりもしますし、興味を持った事には突進しがちですが、基本的に…、」

基本的には面倒見の良い方で、とても素敵な女性ですよ。

そう締めくくる筈だった私は、言葉をそこで飲み込む。

いつの間にか開いていた扉から伸びた手が、後ろから私に絡み付いたからだ。

しなやかな指先が、私の頬を両側から押さえる。

「…余計な口をきくのは…この口かしら?」

「……。」

冷ややかな笑みを浮かべるアヤネ様に、私は内心冷や汗たらたら。

…ご、誤解です。

フニフニと両頬を押された不細工な顔で私が、あうあうと混乱していると、腕にぎゅうっと何かがしがみ付いた。

「……あら。」

美人さんはキョトンと目を瞠った後、にんまりと意地悪な笑みを浮かべた。

その視線を辿ると、私の腕に抱き付いていたのは…シャロン様でした。

ビクビクと震えながらも、私の腕を掴んでいるのは、もしや庇ってくれているんでしょうか…！？

か、…可愛い！！！

「今日は可愛らしい子猫が張り付いてるわね。何処から攫ってきたの？」

…すっかり面白がってますね。アヤネ様。

楽しそうなところ申し訳ありませんが、訂正させていただきますよ。

「シャロン様は猫じゃなく小鳥さんです。可憐で綺麗で繊細な小鳥さんなのですよ！」

胸を張って宣言した私を、アヤネ様は、とても残念なものを見る目で見た。

「…訂正するところは其処なの。」

……え。他に何処が？

・

02

「…はい、火傷しないようにね。」

アヤネ様はそう注意を促しながら、白い陶器のカップを私とシャロン様の前に置いた。

取り敢えずお茶にしましょう。とアヤネ様が連れてきてくれたのは、書庫に隣接する部屋だった。

元々談話室として設けられていたのか、小綺麗な其処にはアヤネ様が持参したと思わしきお茶セットと茶菓子が置いてある。その隣に丁寧に積み上げられた本があるあたり…実は書庫のヌシだったりしますか、アヤネ様。

「ありがとうございます。」

お礼を言って私がお茶を飲むと、シャロン様も、慌ててお礼を言っていた。

書庫に来るのが初めてらしいシャロン様は、何処を見ても興味津々で可愛い。

おどおどしながらも瞳を輝かせる様が、微笑ましいです。こんな妹欲しかったなぁ…。

「…こぼれるわよ。」

「へ。…あわわっ、」

シャロン様を愛でていたら、手元が疎かになっていたらしい。
呆れを隠しもしない口調でアヤネ様に注意され、私は慌ててカップを持ち直した。

…姉気分に、十秒すらも浸れませんでした。
流石、私。期待を裏切らない粗忽者っぷり。

「…ところで、そちらはレダの王女様よね。貴方の交友関係はどうなっているのかしら？」

「…えーと。」

「……し、シャロン・ロッド・ダリアと申しますっ。」

私が何と返そうかと悩んでいる間に、テンパり気味のシャロン様が頭を下げた。

私相手だと『知ってるわ』とバッサリ切り捨てそうなアヤネ様は、シャロン様にニッコリと笑む。

「ご丁寧にありがとうございます。私はアヤネ・サイリと申します。」

「…私はサラサ・トウマと申し…」

「知ってるわ。」

「……。」

…なんか仲間外れで寂しかったので、さりげなく混ざってみたら、案の定バッサリと切り捨てられました。

流石、アヤネ様。突っ込みの切れ味半端無い。

…では無くて。

「シャロン様とは、つい最近お友達になりました。…といいますか、待ち伏せして、仲良くなってもらいました。」

「……何をしているのよ。貴方は。」

ぶっちゃけてみたら、アヤネ様は、がっくりと肩を落とした。
本当に、残念な子ね…と言わんばかりの視線が刺さります。

「…わたくしを、待っていて下さったんですか？偶然ではなくて。」

……う。

キョトンと瞠られたシャロン様の目が痛い。
すみません…純真無垢な乙女を待ち伏せなんてして。

「……ごめんなさい、シャロン様。……怒ってます？」

「いいえっ！…ですが、何故そのような事を…？」

シャロン様のもっともな問いに、アヤネ様の視線も私へと向けられた。

私は悩みつつも、事の成り行きを説明する事にしました。
…別に隠す様な事じゃありませんしね。少なくとも、この二人には。

陛下を好きになった事や、あの方の為に何かしたいと思った事、
それから、後宮の皆に仲良くしてもらいたいと思った経緯を、掻い摘んで説明した。

二人は、とても驚いていました。シャロン様は大きな目が更に大きく。

アヤネ様は、呆れとも驚嘆ともつかない顔で、ため息をついた。

「…貴方の一途さには恐れ入るけれど……それは中々無謀な話よ。」

「はい。」

私は苦笑を返すしかありませんでした。

確かに、誰が見ても無謀な事です。

側室の方々は、単純に相性の問題だけで仲違いしている訳ではありません。其処にはどろどろとした政治の問題すら絡んで来るでしょう。

後宮入りした理由も様々で、

私やアヤネ様はたぶん、父の出世の為で、

シャロン様は、藩属国の王女様ですから、人質…とまではいきませんが、牽制の意味合いがあるんでしょうね。

他の方々も、それぞれに背負っているものがある、きっと。

「…で、ですが…とても素敵な事だと思います…！」

「…シャロン様。」

シャロン様は、真っ直ぐに私を見つめ、懸命に訴えた。

「話し掛けていただいて、私が嬉しかった様に、…他にもいらっしゃるかもしれません。仲良くしたいと思っている方が。」

わたくしにも、協力させて下さい。

強い瞳で、シャロン様はそう言った。

懸命な言葉に、胸が暖かくなる。…なんて良い子なんでしょう。

じーん…と私が感動していると、向かいの席からため息が聞こえた。

顔を向けると、理知的な美貌に、苦笑いを浮かべたアヤネ様と目が合う。

「……しょうがない子ねぇ。」

「……アヤネ様？」

「…貴方達だけじゃ、どんな危険な事になるか分からないわ。…お姉さんも、一緒に考えてあげる。」

「…！」

悪戯っぽくウインクして見せたアヤネ様は、とても優しく微笑んでくれた。

私は嬉しくなって立ち上がり、二人に向かって勢いよく頭を下げる。

「…よろしくお願いします！」

…なんて私は幸せ者なんだろう。

無茶無謀な計画に付き合って下さる大切な仲間が、二人もできました。

.

03

「今日のご衣装は、とても素敵な色合いね。何処の染め物かしら？」

「父が西国から取り寄せて下さった布で仕立てましたの。何でも、一流の染め師が…」

まぁ、おほほ…、と。

延々と続く興味の無い話題に表面上だけ合わせる様に、私は引きつる顔で笑った。

…何ですか、この苦行は。

…私がこんな精神的苦行をつまされているには、訳があります。

説明する為には、少しだけ時間を遡りましょう。

「先ずは敵を知る事が大事よね。」

アヤネ様は優美な仕草で足を組み換えながら、そう言った。

て、敵ではありませんよ。言いたい事は分かりますが。

一致団結した私達はその後、お茶をしつつアヤネ様に色んな事を教えてもらっておりました。

簡単に各国の情勢から、鴻国の現状など、

そして側室の方々のお話を聞いている時に、アヤネ様はそう切り出したのです。

「…知るって言っても、…どうやって、ですか？」

おずおずと訊ねたシャロン様に、アヤネ様はニッコリと笑んだ。

「実は私、お茶会に誘われているの。…いつもなら面倒だから、適当な理由をつけて断ってしまうのだけれど…」

つ、つまり

「…それに参加しよう、って事ですか？」

「そう。」

うわー…。
ついに来ました！お茶会！
小説などでは、後宮のお茶会＝女の洗礼、戦いの場として書かれていますが、実際はどうなんでしょうか？

「…ドキドキしますねー！シャロン様……あれ？」

「……。」

好奇心半分、怖いもの見たさ半分…あれ怯えはどうしたよ？な私が興奮気味にシャロン様を見ると、シャロン様は……ピルピル震えておりました。

か、顔が蒼白いです！

「シャロン様っ？どうなさいました？」

「……わ、わたくし…」

忘れておりました…小鳥さん……いえ、シャロン様は私と違って繊

細な方。
女同士の戦いの場に、勇んで赴ける様な方ではありません。

「ごめんなさい、シャロン様を無理矢理参加なんてさせませんから、安心して下さい！」

「……サラサ、様…」

シャロン様は、私を上目遣いで見ながら、キュ、と服の裾を掴んだ。ゴハァ、と血を吐いて萌え死にそうになった私は、そろそろ側室（仮）とすら名乗るのを止めた方がいい気がします…。

挙動不審になりながらもシャロン様を宥めていると、何故か思い詰めた様に俯いたシャロン様は、暫し間を置いてから、

決意した目で、私を見た。

「……大丈夫、です。わたくし、やれます。」

「…シャロン様、ご無理は…」

「いいえ。……サラサ様が一緒にいてくださるなら…わたくし、頑張れます。」

「衛生兵！！！」

「……えっ？」

しまった叫びが口から洩れました！ですがもういい！！（潔い）

誰が私の鼻血と私を止めて下さい！

本当、なんて可愛いんでしょう…私の天使！マジ天使！！

「…きゃっ、…サ、サラサ様？」

遠慮無くぎゅっと抱き締めると、可愛らしい悲鳴が洩れた。顔を赤く染めてワタワタするシャロン様に頬擦りまでしてしまった…。

「…私も、シャロン様と一緒だと幸せです。頑張れます。」

「……ほ、本当、ですか？」

「勿論。」

「……。」

ぎゅうぎゅう抱き締め合っていると、向かいの席に座るアヤネ様から、大層冷たい視線をいただきました。

呆れを隠しもしない半目で私達を見ながら、ため息をついたアヤネ様は、たっぷり間をあけてこう言った。

「…盛り上がっている所悪いけど、シャロン様はお連れ出来ないわよ。」

「「……。」」

……えっ？マジですか。

「人数が多くなるのも問題だけれど、それ以前に、シャロン様は目立ちすぎるわ。」

「……わたくしが、王女だからでしょうか？」

「そう。…私が招待されたお茶会に同伴していくという事は、私の取り巻きと判断される可能性が高いわ。…シャロン様は、ご自身は控え目な方だけれど、肩書きがね。」

「……。」

成る程。確かにアヤネ様の懸念は最もです。

…捨て犬の様な目で、しょぼんとしてしまったシャロン様を置いていくのは忍びないですが……うぅ…本当、辛いですが。

お土産持って帰りますからねー。

……って、無いんですか？お土産。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6841y/

目指す地位は縁の下。

2011年12月10日00時23分発行